

「コン・ティキ」



2013 (平成25)年5月31日鑑賞

賞<GAGA試写室>

監督：ヨアヒム・ローニング、エスペン・サンドベリ
トール・ハイエルダール (コン・ティキ号の船長) / ポール・スヴェーレ・ヴァルハイム・ハーゲン
トルステイン・ロービー (コン・ティキ号の無線担当) / ヤーコブ・オフテブロヘルマン・ワッツィンゲル (エンジニアの知識を持つ冷蔵庫のセールスマン) / アンドレス・パースモー・クリスティアンセン
エリック・ヘッセルベルグ (トールの幼なじみ、航海経験者) / オッド・マグナス・ウィリアムソン
クヌート・ハウグランド (コン・ティキ号の無線担当、戦争の英雄) / トビアス・サンテルマン
リヴ・ハイエルダール (トールの妻) / アグネス・キッテルセン
ベングト・ダニエルソン (映画撮影の技術に長けたスウェーデン人の民族誌学者) / グスタフ・スカルスガルド

2012年・イギリス、ノルウェー、デンマーク、ドイツ合作映画・113分
配給/ブロードメディア・スタジオ

<あなたはコン・ティキ号とトール博士を知ってる？>

海の冒険なら、昔は『太平洋ひとりぼっち』(63年)の堀江謙一が有名だった。他方、山の冒険なら、最近では史上最高齢の80歳でエベレスト登頂に成功した三浦雄一郎が有名。しかして、あなたは1947年に南米ペルーの港から南太平洋のポリネシアを目指して、太平洋を一路西へと8000kmも渡ったトール・ハイエルダールとそのいかに船コン・ティキ号を知ってる？

コン・ティキ号の船長となったトール博士(ポール・スヴェーレ・ヴァルハイム・ハーゲン)はノルウェーの人類学者で、ポリネシア文明と南米の古代文明の類似を10年にわたって研究してきた人物らしい。トール博士は、新婚の妻リヴ・ハイエルダール(アグネス・キッテルセン)と共に現地住民の中に入って生活する中で、「ポリネシア人の祖先は、太陽神のティキが海の東から連れてきた」という伝説を発見。さらに、島に南米と同じパイナップルが根付いていることを発見した彼は、その他のさまざまな証拠と共に「ポリネシア人の祖先は南米から海を渡ってやって来た」との新説を発表した。ところが、どの出版社も従来の通説に反する彼の発表に見向きもせず、最後の望みを託して訪ねたニューヨークの出版社では、「古代の南米には船がなかったので西へは行けない」と突っぱねられてしまった。トール博士はそれに対して「でも、バルサ材のいかにあります」と反論したが、そこで返って来たのは、「ならば、ペルーからポリネシアまでいかにで行け」という捨てゼリフ。そこまで言われると、生来反骨心の強い(?)彼は・・・?

<原作は？コン・ティキ号の雄姿は？>

トール博士自身が書いた『コン・ティキ号探検記』は世界中で5000万部以上売れた有名な本らしく、私の息子もよく知っていた。本作はそんな原作と、アカデミー賞の長編ドキュメンタリー部門を受賞した記録映画『Kon-Tiki』をもとに、冒険心いっぱいの劇映画として製作されたもので、第85回アカデミー賞と第70回ゴールデングローブ賞外国語映画賞にノミネートされている。李安(アン・リー)監督の『ライフ・オブ・パイ/トラと漂流した227日』(12年)は小説『パイの物語』を原作としたものだった(『シネマルーム30』15頁参照)が、『コン・ティキ』は現実の冒険談を原作としたものだけにリアル感がすごい。

トール博士がこの「冒険」の決行に当たってかたくなにこだわったのは、1500年前と同じ条件で南米のペルーからポリネシアまで8000kmを渡り切ること。いかに船の名前を「コン・ティキ号」としたのもトール博士のこだわりだが、何よりトール博士がこだわったのは、1500年前と同じ材料、同じ方法でいかに船を作ることだ。無線などの備品は「近代文明」の力を借りなければならなかったが、コン・ティキ号の組み立てはバルサ材の丸太と麻のロープだけで徹底させ、鉄製のワイヤーなどは一切使用しなかった。そのため、『ライフ・オブ・パイ/トラと漂流した227日』ではCG合成させたトラが一方の主人公になっていたが、本作では夢とロマンにあふれ、かつ冒険心にあふれたコン・ティキ号そのものが一方の主人公になる。さらに、『ライフ・オブ・パイ/トラと漂流した227日』は映像の美しさが際立っていたが、さて本作は？

<「七人の侍」ならぬ「6人の海の男」に注目！>

本作には、5月12日に観た『L.A.ギャングストーリー』(13年)と同じように、「七人の侍」ならぬ「6人の海の男」が登場する。黒澤明監督の名作『七人の侍』(54年)では七人の侍を、『L.A.ギャングストーリー』では6人の警察官をリクルートするプロセスそのものが前半のメインストーリーになっていた。しかし、本作ではトール博士たち「6人の海の男」が集まるストーリーは簡素化され、可能な限り海の旅の描写に時間を割いている。トール博士の話に最初に乗ってきたのは、偶然トール博士の話聞いた、エンジニアの知識を持つ冷蔵庫のセールスマンであるヘルマン・ワッツィンゲル(アンドレス・パースモー・クリスティアンセン)。トール博士が企画している今回の旅の意義を彼がどこまで理解していたかは疑問だが、彼はこの冒険が味気ない毎日を変革し、人生を変えるきっかけになるのではないかと考えたらしい。しかし、そんな彼にとって今回の過酷な海の旅の現実・・・?

その2カ月後、一気に3人のメンバーが集結。トルステイン・ロービー(ヤーコブ・オフテブロ)とクヌート・ハウグランド(トビアス・サンテルマン)は第2次世界大戦で活躍したノルウェーの無線技師。もう一人のエリック・ヘッセルベルグ(オッド・マグナス・ウィリアムソン)はトール博士の幼なじみで、唯一の航海経験者だった。最後の一人である映画撮影の技術に長けたスウェーデン民族誌学者ベングト・ダニエルソン(グスタフ・スカルスガルド)も自ら志願してきた人物だが、本作を見ていると、何ごとでもやろうと思って走り出せば自然には集まってくるものだということが実感できる。トール博士の自叙伝とも言える『コン・ティキ号探検記』が世界中のベストセラーになったのも、きっとそんな前向きの姿勢に多くの人が共感したためだろう。

さあ、これにて「七人の侍」ならぬ「6人の海の男」が揃ったが、6人の海の男たちが見せる海上での奮闘ぶりや男の友情ぶりは・・・?

<資金は？スポンサーは？トール博士の戦略は？>

マスコミ化した現在では、コトを成すためには良くも悪くもマスコミの力を活用して資金とスポンサーを集めなければならないが、それは第2次世界大戦終了直後の1947年のアメリカでも同じ。その意味では、「6人の海の男」の中に無線技師が2人とベングトのような映画撮影の技術者がいたことはラッキーだった。しかし、それを生かすも殺すも、理論的支柱であると同時に今回のプロジェクトのリーダーであり、かつコン・ティキ号の船長にもなっていたトール博士の能力次第だ。ちなみに、『キネマ旬報』6月上旬号の記事によると、5月25日に宣伝用DVDで観たキム・ギドク監督の『嘆きのピエタ』(12年)は、製作費わずか1億ウォン(約900万円)くらいらしい。メジャーの資本を使うとメジャー側との何らかの約束が生じるし、メジャーのスタイルに合わせなければならないことも起こるため、彼は「低予算」「早撮り」を徹底させ、自分の作品の製作費はよそから集めるのではなく、自分で「捻出」しているわけだ。

その点、トール博士がペルーの大統領と直接かけ合って、ペルー人の誇りを高めることとの引き換えに大量の備品を確保した「交渉術」はお見事だった。本作や本作のプレスシートには当時のクルーたちの写真が随所で使われているが、これはすべてベングトの撮影のおかげだ。本作ではトール博士が資金集めやスポンサー探しに苦労する様子が少しだけ描かれるが、彼の『コン・ティキ号探検記』がベストセラーになったことや、アカデミー賞を受賞した長編ドキュメンタリー『Kon-Tiki』がつけられたことを考えると、彼のマスコミ戦略は結果的に大成功したことは明らかだ。

ここで素晴らしいのは、彼が「金も出すが口も出す」というスポンサーは一切使わず、あくまで自分の信念に従った行動(冒険)を取る中で、その行動をマスコミに認めさせたということだ。コン・ティキ号成功の報告を聞いた時、トール博士に「ならばペルーからポリネシアまでいかにで行け」と言い放った出版社の社長は一体どんな顔色になったのだろうか？これはあたかも、橋下徹大阪市長の「問責決議」を出す宣言しながら、日本維新の会の松井一郎幹事長から「問責は不信任と同じだから、問責決議が通れば出直し市長選をやる」と言われた結果、あわてて「問責」の文字を削ってしまった大阪の公明党のようなものだ。きっとこの出版社も冒険の成功後は手の平を返したようにトール博士とコン・ティキ号の冒険の成功を讃える出版物を出したのでは・・・?

<舵、海流、サメ、そして人間ドラマは・・・>

トール博士が証明するのは「海は障壁ではなく、道だった」ということだが、科学が進んだ現代では正確な世界地図や海図があるうえ、南赤道海流やポリネシア島の手前にあるラロイア環礁についても詳しい科学的知見が得られている。したがってその点では、いくらトール博士が1500年前のペルーの人たちと同じ条件で8000km西のポリネシア島にいかだで渡ると言っても、条件が違っていることは明らかだ。本作を見ていると、トール博士はコン・ティキ号の「仕様」にはとことんこだわり、鉄製のワイヤーを使うことはあくまでも拒否したが、食品品はもちろん無線や海図などは近代文明のそれを活用しているうえ、知識についても自分たちの最高水準のものを活用していることがわかる。しかしそれでも、すぐ側に護衛艦やマスコミの船がいたり、適宜空から飛行機が安全を確認してくれるわけではないから、コン・ティキ号が転覆したりすれば救助はほぼ不可能で、常に生死の危険と隣り合わせであることはまちがいない。あえてそんな客観的状況に自分たちを置いているからこそ、本作に見る嵐、舵の故障、南赤道海流、そしてサメとの格闘などがリアルにスクリーン上から迫ってくるわけだ。

また、狭い空間内での6人の男たちだけの共同生活も、危険がいっぱい、不安がいっぱい、そして孤独がいっぱいの冒険の旅だけに、いがみ合いや対立が生じてくるのは当然だ。舵の故障による不安、無線が通じないことへの苛立ち、コン・ティキ号の周りを泳ぐサメへの恐怖、丸太を結ぶ麻のロープが切れることへの不安、さらに必然的に遭遇するであろう大嵐の恐怖、等々は切実だ。

本作中盤は、大海原に浮かぶちっぽけなコン・ティキ号の中で展開される、そんな人間ドラマがメインとなる。最初に人間的な弱さを見せるのはヘルマンだが、航海士の役割を担っているエリックもコン・ティキ号がホントに南赤道海流に乗るのかどうかに不安を持ち、焦ったのは当然。また、クヌートがかわいがっていたオウムがサメの餌食になったことを引き金として展開される、人間とサメとの抗争はスリル満点だ。さらに、戦争の英雄だが心に深い傷を負っていたクヌートが、海の中でサメの餌食になろうとしているヘルマンの命を助けるために取った決死の行動は、いかなる意味を？本作中盤では、そんなこんな人間ドラマをじっくりと鑑賞したい。

<クライマックスのラロイア環礁越えをしっかりと！>

本作は中盤でも大嵐との格闘やサメとの死闘など見どころいっぱいだが、ラストにはトール博士がそれまであえて海の男たちに説明していなかった、いかだ船とっての最後の難所、ラロイア環礁越えのクライマックスが待っている。1796年にイタリア方面軍の司令官に任命された若き日のナポレオンが、弱りきっているフランス軍兵士に「兵士諸君、裸だ、食べ物はない。政府は諸君に何も与えてくれない。私は諸君を世界で最も肥沃な平原に連れて行く。諸君はそこで、名誉・栄光・富を得るであろう」と鼓舞してアルプス越えを成功させたのは有名なお話。この時の馬上に乗ったナポレオンの勇姿を描いたジャック=レイ・ダヴィッドの「アルプスを越えるナポレオン」の絵も有名だ。しかして、ポリネシアの島に到達するための最後の難所になる、ラロイア環礁越えはいかに？

ここで意外な知恵を出し、トール博士たちを納得させたのがヘルマン。彼の言うところによると、波には周期があり13番目の波が1番大きいから、コン・ティキ号をそれにうまく乗せることができたらラロイア環礁を乗り越えることができるそうだが、それってホント？しかし、今はそんなことをあれこれ議論している余裕はないから、トール博士は直ちにヘルマン案を採用。第2波、第3波でコン・ティキ号が進んでしまわないように無線機などの重いものを縄にくくりつけて「にわかイカリ」を作って海に投げ込み、あたかもサーファーのようにコン・ティキ号が13番目の大波に乗れるよう、命懸けの体制を整えたが、さて現実・・・?

本作は冒険、子供時代も冒険好きだったらしいトールが、氷が解けて湖状態になったところに浮いている小さな氷の上に乗って遊ぼうとするシーンが登場する。周りの子供たちが「危ないからやめろ」と止めるのも聞かず、腕白盛りのトールは氷の上に飛び乗りそこでパフォーマンスをしようとしたが、その後バランスを失ったトールは冷たい湖の中に落ちてしまったから大変。そのうえ何とトールは泳げないらしいから、このままでは命の危険も・・・。そんなトールが、ちっぽけなコン・ティキ号でラロイア環礁越えという一流サーファー顔負けの一世代のパフォーマンスを決行しているわけだが、さてその結末は？

本作のクライマックスとなる、大スクリーン上に見るコン・ティキ号によるラロイア環礁越えのパフォーマンスは、あなた自身の目でしっかりと！